

翻訳という世界



船越 隆子

翻訳家

30年ほど前、翻訳の仕事をはじめたころには、原稿はまだ手書きだった。原稿用紙に鉛筆で書き、推敲してから清書をする。だかも、東京や全国この翻訳家、訳文は締め切り日までに少し余裕をもって仕上げ、清書する時間を残しておかねければならなかった。

大学の卒論は英語で書くことになっていたが、英語なら当時でもタイプライターがあった。ただし、個人が持っているのは昔ながらの手動のタイプライターで、打ち間違えたときには白いテープをはさんで二度打ちをして文字を消し、何文字も間違えた場合は最初から打ち直さねばならなかった。

初めてワープロを買ったのは、大学を卒業してから6、7年後のこと。デスクトップ型の一番安価なものでも数十万円もした。それだけワープロが貴重な時代だったのだ。

手書きからワープロになったが、その間一度も電話

ったのは実に画期的なことだった。そしてその後パソコンが普及し、ワープロ機能だけでなくメールやインターネットも使えるようになったのは、まさに「革命」だった。

前回は、ネットが調べものに威力を発揮するということを書いたが、実は仕事探しにおいても、ネットはとてもありがたい手段。私のように徳島に住んでいて

10年ほど前、ネット求人の初仕事を見つけたときには、正直言って戸惑った。依頼主は東京在住の映像演出家ということだった

が、信用していいかどうか判断しかねたのだ。ネット上の「フリーの映像演出家」というのは、いかにも怪しそう。もちろん先方にとっては、私のようなフリーの翻訳家もかなり怪しかっただろう。

ただ、1、2度メールをやりとりすると、きちんと仕事をしている人だということが分かった。結局は仕事を引き受け、野生動物のドキュメンタリー番組の吹き替え翻訳をさせてもらった。1年近く一緒に仕事を

ネットで仕事探し メールで信頼構築

〈3〉

すらしなく、メールのやりとりだけで、仕事は支障なく進んでいったのである。

昔人間の私は、今後とも一緒に仕事をするなら一度は会っておきたいと思った。それで、所用で上京する際に「会いませんか」とお誘いした。

お互いに顔を知らないから「私はこんな髪型で何色の服を着ています」「僕は身長何センチくらいで、手に何を持っています」みたいなメールのやりとりをして、銀座4丁目の交差点で待ち合わせた。

すると、彼からのメールには「楽しみにしています」の文面の最後に絵文字でピンクのハートマークが。おそらく相手は40代のおじさんで、こちらも同年代のおばさん。これこそちょっと怪しい？

まるで「出会い系」ではないか。そういう事情に疎かっていた私は、大学生の煙に聞いてみた。「それ、ちょっとヤバイかも」(笑)

でも結局は、とてもいい人で、仕事にも真面目で面白い話もたくさん聞けて、すっかりご馳走にもなっていました。

その後はスタジオでの収録で一度会っただけで、また「メル友」に戻っている。けれども、会ってどん

船越さんが以前使っていたタイプライターとデスクトップ型のワープロ。今はパソコンが普及してあまり見かけなくなった



な人が分かっているから、目に向き合って誠実であれば、つきあい方は問題ではないということだろうか。顔を合わせない出会いもあることで、逆に、出会える仕事の幅はたしかに広がっている。

けれども、同じようにネットで知り合った奈良の翻訳会社の人とは、もう3年落とし穴もあるだろう。越しのつきあいになるが、いまだに一度も声すら聞いていない私がラッキーなだけかもしれない。でも今は、翻訳の世界でも、そういう出会いの仕方も可能な時代になってきた。

要は、互いが仕事に真面目は、互いが仕事に真面目

手書き時代から隔世の感

(徳島市在住)